

障害は 才能だった

アメリカ最大のコピーサービス店「キンコース」の創業者、ポール・オーファラさん（写真）は、自身を「最高にADHD（注意欠陥多動性障害）」と表現する。「じっとしてられない」は「エネルギー」ということ。「もし私が、あちこち店舗を飛び回らなかったら、ビジネスを広げるアイデアは思いつかなかったね」。障害は生かし方で才能に転換するのだ。



Photo Courtesy of Gary Moss

住民流福祉総合研究所

木原 孝久

〒350-0451 埼玉入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話・049-294-8284

Eメール kiharas@msh.biglobe.ne.jp

ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~waku/>

はじめに

本書は障害者福祉について、これまでとは違った見方を提供しようとするものである。「障害」は文字通りハンディキャップだから、あとは残存能力を使うより仕方がないと考えるものだが、ちょっと待って！ 障害は必ずしもハンディキャップではない。むしろ生かし方次第で才能になるのだ。

自閉症のために天井のシミが気になって仕方がない青年が、印刷所で働いている。小さな印刷ミスを瞬時に見つけられるという。障害が才能に転換した。その他にも、些細なことにこだわるとか、時間をかけて丁寧にやらないと気がすまない、といった障害者に特徴的な性向が、生かし方によって「特技」になり替わる。「薄切り豆腐」で店になくってはならぬ存在になった人の事例が、あとで出てくる。

才能が潜んでいるかもしれない「障害」の部分は見切って、ただ軽作業をやらせているのは、もしかしたら大変な罪作りかもしれないではないか。これから求められる福祉は、生活保障もさることながら、彼等が持っているはずの潜在能力を開発し、社会に生かすことかもしれない。

そのためには、社会がそれを「能力」と評価しなければならないし、その「能力」が生かされる場を用意しなければならない。その能力を磨くために社会の超高級資源を障害者に特権的に投入する必要もある。ハードルは意外に高い。しかしそれでもやらねばならない。

《目次》

- 第1章 障害児を天才に仕上げる「親ばか力」／3
- 第2章 「能力開発型」福祉への発想転換／7
- 第3章 障害児の運命を分ける-ポジティブ診断とネガティブ診断／12
- 第4章 障害特性のプラス面を生かす／15
- 第5章 能力開発社会を作らねば／17
- 第6章 障害・病気は個性だから治したくない／19
- 第7章 障害者には超高級資源を投入せよ／22
- 第8章 ポジティブ思考のすすめ／26

第1章 障害児を天才に仕上げる「親ばか力」

全盲の辻井伸行さんが有名なピアノコンクールで優勝したことで、母親のいつ子さんの「天才を育てる教育」に関心が集まっている。彼女の「親ばか力—子どもの才能を引き出す10の法則」を読んできた。

■わが子が持っているはずの能力への絶対的な信頼

障害児を一人前以上に育てるためになぜ「親ばか力」が必要かということには、きちんとした根拠がある。障害児に潜んでいるかすかな才能のタネを見つけ、それを（様々な障害、壁を乗り越えて）伸ばしていくには、その子に対する法外な愛情と、その子が持っているかもしれない能力への絶対的な信頼が必要なのだ。一般人と同じように冷めた見方をしているのは、その能力を探し出すことは無理である。

■わが子を継続的に観察し、ちょっとした反応や変化を見逃すな

彼女の言う「才能を引き出す10の法則」を整理してみると、図のようになる。こうしてみると、「えっ！」と驚くような指摘は見つからない。わが子の中に眠っているであろう才能の存在を信じる→その才能のタネを探す→それを伸ばす—とえば、「当たり前だ」と言われそう。しかし、その周辺に並べた「周辺事項」を一つ一つ点検していくと、これまでに言われていなかったことが確かにある。

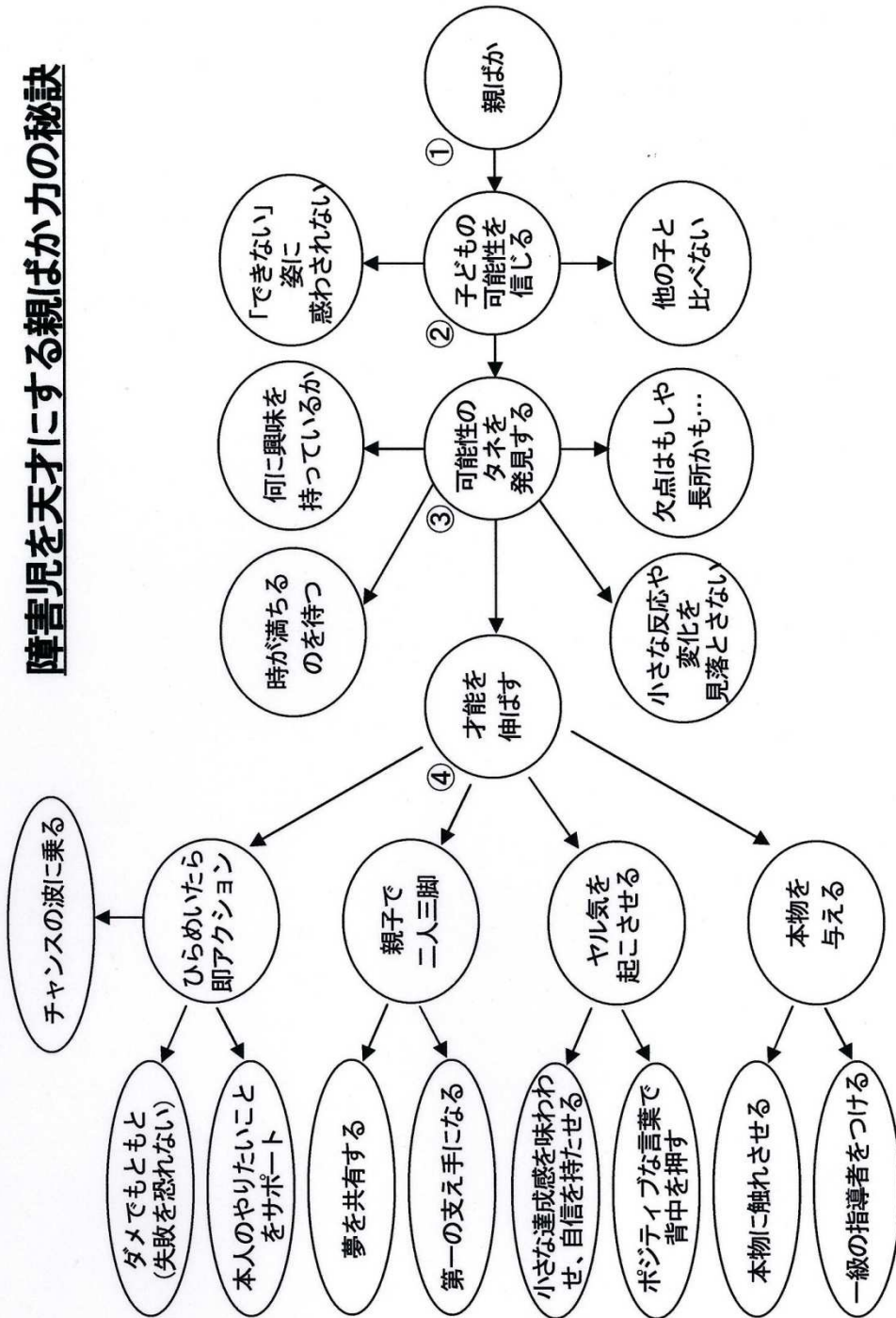
障害児のわが子を日々眺めていて、そこに特別な才能のかけらがあるかもしれないという思いは、そうそう出てくるものではない。目の前にいる子は、普通の子にとっては簡単なことさえ出来ないことばかりなのだから。それでも、その子にかすかに存在するかもしれない才能を探そうと思うには、「とてつもない愛」が必要なのだ。

私だって「愛」はあるよ、と言う親に彼女が主張するのは、わが子をきちんと継続的に観察し続け、ほんのちょっとした反応や変化を見逃すなということである。

「生後三ヶ月のときのこと、毎日かけていたCDを買い換えたとき、それまでは毎日、腹ばいになって手足をバタバタさせて大喜びしていたのに、その日はなぜか伸行の機嫌が悪くなりました。同じショパンの『英雄ポロネーズ』をかけているのに、

なぜ前のCDと同じように上機嫌にならないのだろうと考えたとき、『演奏家が違うからじゃないか』とひらめいたのです」。そこで前と同じスタニスラフ・ブーニンのCDを再度探してきてかけたとたんに、「伸行は手足をバタバタさせて、ノリノリ！」—この子は演奏家を聞き分ける聴力を持っている。もしかすると音楽の才能があるかもしれない—と思い至ったのだ。

障害児を天才にする親ばか力の秘訣



■欠点(障害)を長所(才能)と逆転して見られる資質

こうした「気づき」も並みの母親にはできにくい、もっと高度な「気づき」を求められる場合もある。幼児期の伸行さんは、生活雑音に対して、異常なまでに敏感だったという。「(伸行は)掃除機や洗濯機の音が鳴り始めると、火がついたように泣き出してしまうのです。…そのたびに私は掃除や洗濯を中断し、伸行をあやして機嫌を直させなければなりませんでした」。

スーパーで聞こえてくる「いらっしゃいませ」の声にも、レジの音にも泣き出してしまふ。「当時は癩の強い子なのかなと思っていたほどです」。—そう考えるのが普通の親だろう。しかし彼女は、やがてこれを、逆転して見られるようになった。

「癩の強い子」ではなく、「たぐいまれな聴力を持った子」なのだ。つまりその子の「欠点」(障害)と思っていたことを、逆に長所(才能)だと逆転して見られる資質—これがいつ子さんの優れたところなのだ。

■本物を与える、超一流の指導者を付ける

才能の「片鱗」を発見した後にすべきことを、ここでは4項目挙げておいた。一つは、本人と「二人三脚」で歩むこと。盲目の音楽家といえばバイオリニストの和波孝禧さんを思い出すが、彼の場合もお母さんが彼と一体となって歩んできたことがよく知られている。子と一緒に学び、楽譜をすべて点字に変え、家に戻って再度レッスンにつき合う。本人以上の頑張りが必要であったことは容易に想像がつく。伸行さんも、母が夜中まで楽譜の読み方の勉強をしているのに気づいてから、母を「同志」とみなし、よりいっそうピアノのレッスンに励むようになったという。

いつ子さんのことで感心させられるのは、一つは、「ひらめいたら即アクション」と、「本物を与える」だ。伸行さんは一歳五ヶ月でレッスンを始めた。先生と一緒にピアノに向かって親指でドレミを弾くぐらいからだが、「本物」に触れさせねばと、本物のピアノ演奏家に来てもらって、わが子の前で弾いてもらったりした。

その後も、新聞に「将来アーティストになりたい人のためのコンサートがモスクワで開かれる。出場者募集中」と出ていたのを読んで、モスクワに直通電話をかけたという。普通の人ならビビルところだが、彼女は深く考えるまでもなく、即行動に移す。そうした積極姿勢のおかげで、次々と新しいチャンスが巡ってくる。彼に

ピアノを教えてくれる人、アドバイスをくれる人、演奏のチャンスを与える人—常に「本物」であるとともに「超一流」の人材に彼女は接触しているのだ。

そういう人材の協力を得るには、こちらもその気で頑張らねばならない。ものすごいプレッシャーが母子にかかるが、それを敢えて受け入れていく—このあたりは凡人の私たちは、引いてしまうところかもしれない。「チャンスの波に乗ってみる」—彼女はこう記している。「『まだ早いかな』『無理かも』など、ネガティブなことはいっさい考えません」。

障害を持った人にこそ、(並の資源ではなく) 超一流の資源を与えないといけない—フェアネスの発想は本書の後段で詳述するが、いつ子さんもまたこのフェアネスの発想を実践していた。

■親だけにしか与えられていない独占的な力と義務

「親ばか力」と言うように、これはその子の親だけにしか与えられていない「力」である。他人はしよせん、他人でしかない。

障害児の親は、「親ばか力」を確実に持っているからこそ、わが子の能力開発への努力から逃れられない。障害ゆえに、才能のタネは普通の子ども以上に「かすか」で、しかもそれが開花するには、人並み以上の時間と努力が求められるのだ。

第2章 能力開発型福祉への転換

■だれもマーラーを統合失調症とは見ない

辻井いつ子さんは、初めから伸行さんを天才ピアニストに育てようと思ったわけではない。それどころか、彼は視覚障害児としても他の子より劣っていた。この事実が、彼女をわが子の才能開発に振り向けさせた。何もかもできない、という事実は、障害児を持つ母親にとってとても受け入れられないことだ。

一般に障害者というのは、ハンディキャップがあるということ以上に、そのおかげで「何もできない人」というイメージが付きまとっている。視力障害があるから歩行に不便、文章を読むのに不便という個々の事実を超えて、「何もできない」という見方を周囲の人に与えている。そちらの方が問題なのだ。

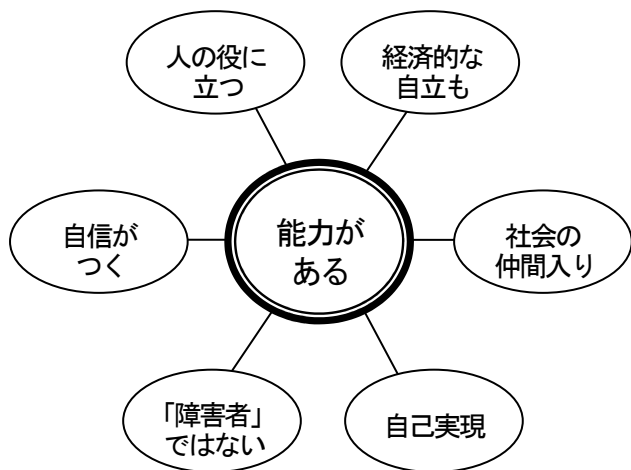
マーラーという高名な作曲家は、統合失調症だったと言われている。そのことを承知していても、彼を病人とは誰も見ない。作曲家として才能を発揮していたからだ。特定の分野で一定の能力を発揮したとき、周囲はその人を病人とか障害者とは見ないのだ。少なくとも「何もできない人」とは思わない。

いつ子さんは、いつか伸行さんがレイ・チャールズのようになることを夢見ていた。レイ・チャールズが全盲であることは音楽愛好家は皆、知っているだろうが、しかし彼はそれ以上に優れた音楽家なのだみんな思っている。それをこそ、いつ子さんは夢見ていたのかもしれない。

■「能力がある」ことにこれだけの付随的なメリット

実際に、ある種の能力・才能があることが判明すれば、さまざまな可能性が広がっていく。図を見ていただきたい。その能力で人や社会の役に立てる。そうすれば社会から一定の評価もされるし、社会への仲間入りが認められる。それで経済的な自立も図られる。その能力を活かすことで自己実現も図られる。「障害者」という見方を弱めさせることもできる。何よりも自分に自信ができる。

こう考えると、「福祉」というのは、対象者の生活救済とか、ガイドヘルプ、ふれあいの輪に加えるといったこと以前に、その人の潜在能力を開発し、それが開花するように支援することの方が大事だということがわかってくる。



■障害者の能力開発に2つの道

次頁で紹介した図を見ていただきたい。障害者の能力開発には二つの道がある。大抵の障害者はこの2つの道のいずれにも可能性がある。

その一つは、残存能力の発掘。または障害とは関係のない、その人が備えている特殊な才能。辻井さんのように、

視力障害はあるが、音楽的才能に恵まれていたので、これを伸ばす努力をした。これが残存能力と言うよりも、特殊才能だ。

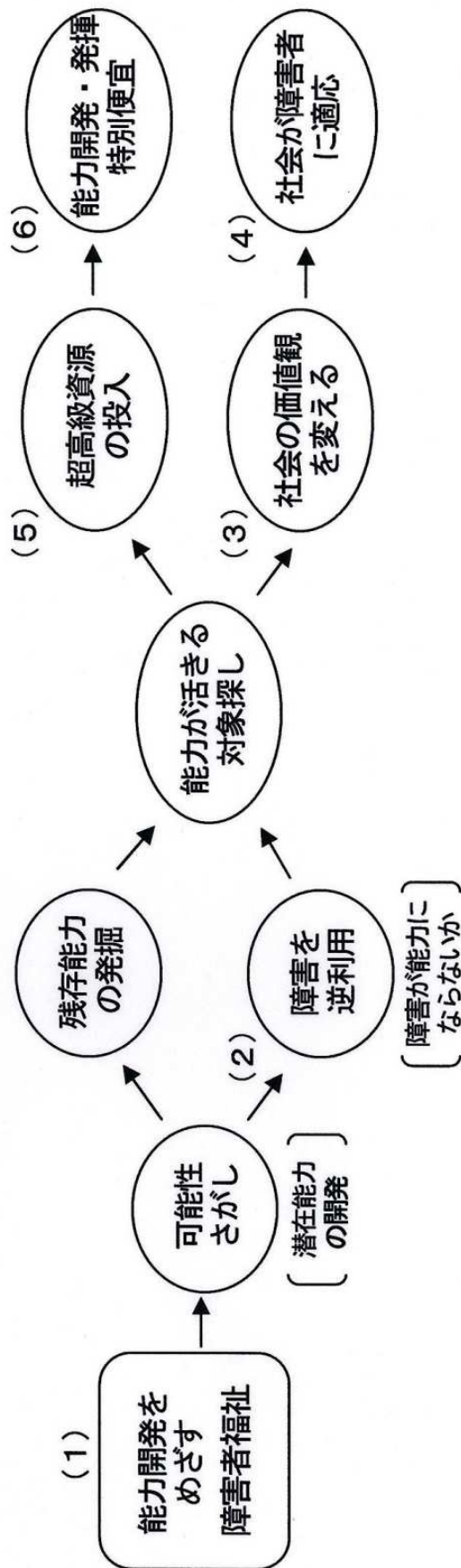
■残存能力の開発か、障害を逆利用か

もう一つは、「障害を逆利用」。じつは辻井さんの場合も、目が見えないということが、その才能が発揮されるにつれて、逆に生かされることになった。楽譜からもピアノからも「自由」であるということが、究極の音楽家への近道となったわけであるが、同じようにして、才能の探し方として、その障害ゆえの特異な行動や志向性、性格形成の中に、もしや「能力」に転換できるものはないかを探すのである。

自閉症者が、天井などの細かいシミが気になるということを利用して、印刷所で刷り上ってくる印刷物のちょっとした印刷ミスに瞬時に気づくという「能力」として活かしているといった具合である。あるいは、色盲の人がこの（一見）ハンディキャップを利用してカラーコーディネーターとして大成したとか。

■「能力」として生かせる対象がないと…

「天井のシミが気になる」という自閉症児の「障害」のあらわれ—を「能力」と見るには、それが「能力」として生かせる対象を見つけ出さねばならない。「印刷所で役立つかもしれない」と思いついた時はじめて、「能力」に変わるのだ。



■自分の病気を活かして芸術に

詩人の登竜門である中原中也賞を受賞した須藤洋平さんが、朝日新聞の「ひと」欄に登場。彼は「トゥレット症候群」という難病を抱えている。顔をしかめたりする運動チックと汚い言葉を発する汚言症などの音声チックを患い、誤解と偏見に苦しめられたという。

その彼がなぜ詩に取り付いたか。「封印してきたものがあるから、すらすら書けた」と言っている。「孤独とじゃれあえ」という詩がある。「芸術なんだ！僕の身体は芸術なんだ！」それがその時の僕の唯一の逃げ場だった、とつづく詩。これらの発言に一貫しているのは、自分の病気、その症状を「活かして」芸術を作ったということだろう。病気、障害が彼の能力の源になった。

■水玉模様の幻視に悩まされたので、それが芸術のモチーフに

前衛芸術家の草間彌生さんと言っても、誰のことかわからない人も、水玉模様一本で勝負している女性といえば、「ああ、あの人か」と思い出すのではないか。展示会場全体を水玉模様で埋め尽くす。自分の衣装にも水玉模様。これに、いつどんなきっかけで閃いたのか、知りたいと思っていたが、意外な事情があることが分かってきた。

彼女は少女時代、「視界に水玉が浮かぶ幻視や幻聴に苦しんでいた。まさに「病氣」であったが、おかげで彼女の芸術の最大のというよりは、唯一のモチーフができた。そうは言っても、彼女にとっては生易しいものではなかったようで、「精神的には大変で、いつも自殺に憧れていた」（朝日新聞「be」）。心の病を克服するために芸術を続けてきたと言うぐらいなのだ。

■色弱だからカラーコーディネーターになった

同じく朝日新聞の「ひと」欄を飾った障害者がいる。伊賀公一さんと言って、色弱のカラーコーディネーターというユニークな肩書きを持つ。色弱の人から最も遠い職業がカラーコーディネーターなのだが、彼はそこにチャレンジした。

色弱だから色の関係は駄目と単純に考えず、自分の色の見え方の特徴を詳しく把握し、一方で色彩の仕組みを勉強し、色の性格や活かし方の理論を頭に叩き込んだ。

しかも色弱の人だからこそできるカラーコーディネーターの仕事を見つけ出した。考えてみれば色弱の人が全国に300万人もいる。ここに市場がある！色弱者の見え方を再現するディスプレイや見やすい地図などを製品化した。彼もまた色弱というハンディキャップを「活かして」仕事にしてしまった。ハンディキャップはそこでハンディキャップではなく、能力の源になった。

■社会が障害者の行動に「価値」を見つけられるか？

障害児から探し出した「能力」を社会に「能力」と認めさせるには、社会の価値観を変えさせなければならない場合もある。

ある町にTちゃんという人気者の障害児がいて、一日中まちを自転車で走り回っている。朝は駅前にいて、通勤サラリーマンたちに「おはようございます！」と声をかける。昼間は別の駅に行って、電車が到着すると駅員に改札業務を促したり、児童館や図書館で掃除の手伝いなどを買って出る。夜になると公民館に行って、趣味グループなどの活動を手伝う。いつもニコニコしていて、こちらも楽しくなる。

これもまた「障害」の表れだろうが、この行動をそのまま社会は価値として認めることはできないものか。「ふれあいコーディネーター」といった呼称で、いくばくかの手当をまちは支給してもいい。それには地域住民が、彼がやっていることの価

値を認めなければならない。「手当を支給してもいい」と思うようになるには、住民教育が必要だ。これが9頁の図の中の「社会の価値観を変える」に相当する。

企業の社会貢献セミナーで、事例発表者として招待された某企業の知的障害者向け授産施設の長が、余談として「面白い障害者がいる」と言い出した。その人の挨拶の仕方に物凄い魅力があって、施設を訪れた客は、その挨拶に出会うと、メロメロになってしまうほどだという。たしかに知的障害者の中にそういう魅力を備えた人がいる。たまたまそのセミナーの席に都内の百貨店の社会貢献担当職員が数名いたので、私は尋ねてみた。「この知的障害の青年を、挨拶という仕事だけで、月に4万円（彼が作業によってもらっている工賃）を払う気があるか？」と。数名の百貨店の関係者がヒソヒソ話し合った結果を一人が発表した。「払います」と。

■社会の方が障害者なのだ

そうすると、その人が障害者になるか、才人になるかは、社会の関わり方次第ということになる。未だに大部分の心身にハンディを抱えた人が、「障害者」と見られているということは、彼らの能力を開発し、活用できていないということに他ならない。つまり「社会自体が障害を抱えている」と言わざるをえないではないか。それを脇に置いて、その人を「障害者」と位置付けることに専心している。

■職場がこの人に「合わせる」必要が

図の最後の部分であるが、辻井さんの場合はピアノ演奏に必要なサポートをすればいい。ガイドヘルプとか。ところが、アスペルガー症候群の人が職場で持って生まれた計算能力を生かすには、職場がこの人に「合わせる」必要がある。当人は変わりようがないのだから、周囲が変わるより仕方がない。本人が職場に適応するのではなく、職場が本人に適応するのだ。そういう社会をつくっていかねばならない。

あるアスペルガー症候群の人は、社内メールをあちこちに発信した後、その日に返信が来ないと混乱して取り乱してしまう。そこで社は、その人のメールが来たら皆、必ずその日のうちに返信するように指示した。これで簡単に問題は解決した。

これもまた一見簡単なようだが、他の社員からしたら「なぜ？」という疑問が出てくるのではないか。障害者を受け入れるには、自分たちがその人に「適応」する

以外に道はないのだということを理解させねばならない。

第3章 障害児の運命を分ける

「ポジティブ診断」と「ネガティブ診断」



■スピルバーグも学習障害者だった

地域で見かける障害者が、本当はどんな障害を持っているのか、周囲から見てよくわからないという場合が多い。「どこか変な人」といった噂が広がって、疑心暗鬼で見ている。ならば、きちんと診断を受けさせたらどうかという考え方も出てくる。

最近、映画監督のスピルバーグ氏が、自分は学習障害者だった、と打ち明けた。映画俳優のブラット・ピット氏は、「人の顔が覚えられない」という障害を抱えていたことが分かったと発表した。この障害のために、相手に失礼な思いをさせて悩んでいたが、これが「障害」のせいだということがわかって安心したという。スピルバーグ以外にも「自分は学習障害者だった」と告白する有名人はたくさんいる。自分は強迫神経症だと告白する女優もたくさんいるらしい。

こんな話が最近、増えている。診断技術が進歩したおかげかもしれない。ただ、スピルバーグが「自分が学習障害者」であるとわかったことで、何かが変わるわけではない。子どもの頃に悩んでいたことの原因が明らかになっただけだが、本人からしたら、心の中にあつた屈託が消えていくぐらいの効果、またはそれ以上の効果はあったのではないか。それに、今まで紹介した人たちは、すでに社会で成功を収めた人たちだ。今さら障害を告白しても、偏見の目で見るとはいるはずもないし、精神科医の治療の対象にもされる心配はない。

しかし、その人にどんな可能性があるのかが見えていない障害児にとって、こういう診断がなされることは、良い面悪い面の双方から考えていかねばならないのだ。

■精神科医の「患者」にされるだけでは救われない

いわゆる遅進児の能力開発に関わっている学者が、診断によって、新しい障害児が次々と増え、彼らが特別支援学級の方へ送られた結果、かえって潜在能力の開発の機会が失われていると指摘している。

診断に関わる精神科医は、その子たちにただ「治療」という姿勢でのみ関わろうとする。診断の結果、障害と共に新たな能力が発見され、それを意図的に伸ばす好機とするのならいいのだが、現実はその逆である。

「診断」を精神科医の独占物にしてはならないということだ。診断そのものは医師の役割としても、その結果をどのように生かすのかという場合に、他の様々な関係者が参加していかなければ、困ったことになる。精神科医の「患者」にされるだけでは、救われないのだ。

■能力を十分発揮させるための「検査」

ディスレクシア（学習障害）の人の支援を行うNPO法人「エッジ」代表の藤堂栄子さんの息子さんは15歳でイギリスへ行ったのだが、留学先の学校から「息子さんはディスレクシアではないかと思うので、検査をさせてほしい」と言ってきた。

検査と言っても、治療のためではない。「もし今ディスレクシアと分かれば、息子さんに合った学習支援ができ、そうすれば息子さんが持っている能力を十分に発揮させてあげられますから、ぜひ検査をさせて下さい」というのである。こんなポジティブな言い方をされると、一も二もなく「お願いします」と言いたくなった、と栄子さん。

結果、やはり息子さんはディスレクシアであったのだが、この時、学校の先生は何と言ったか。なんと、「おめでとうございます！」ときたのである。「大当たり、一等賞」と言わんばかりだったとか。「やはり、彼がすごく頭がよくてキラキラしているのは、ディスレクシアのお陰だったんです。でも読み書きができないということは、勉強する上で非常に困難を伴います。だから、私たちはこういう支援をします」という感じで、すぐさま、ディスレクシアに合った勉強法を教える授業を組んでくれたそうだ。

■「ポジティブな診断」というあり方はないのか？

「診断」と言えば、その人の「悪い部分」(患部)を見つけるためにやるものだが、もう一つの診断を考えるべきかもしれない。その人の特徴的な資質を発掘して、それを生かすための「診断」である。従来のは「ネガティブな診断」で、今紹介したのは「ポジティブな診断」である。

これができるには、「特徴的な資質」(個性)を見つけても、その具体的な生かし方のノウハウがなければ、どうしようもない。藤堂さんの場合は、学校がそのノウハウを持っていたから、ポジティブな診断が可能になった。

今の日本では、診断はただ「障害者」を摘発するだけに終わってしまう。

■「ADHDならば体操をやったら？」

娘たちが動物病院に猫を連れて行った時のこと。待合室にいた幼稚園ぐらいの女の子が驚異的に元気で、1秒とジッとしていない。フードの棚によじのぼったり商品を片っ端から引っ張ったり、激しく回転し続けて頭をぶついたり。病院へ行けばADHDと診断されそうな子だが、世間の人には「躰ができてない」と見るから、病気の犬を抱いていて動けない母親は、必死で言葉で大人しくさせようとしていた。

この時、隣にいたおじさんの対応がうまかった。「静かにしなさい」と怒るのでなく、子どもが興味を持ちそうな話題で次々と話しかけ、上手にその子の気を逸らしてくれたのだ。

おじさんが「孫は体操クラブにいる」と話したら、少女の母が言った。「あら、この子も入れようかしら。近所の人に『この子には体操をやらせた方がいい』って言われたんです」。するとおじさんも手を打った。「それはいい。うん、この子は体操をやらせた方がいいよ」。

この子は落ち着きがないから、躰をしなきゃいけない、病院で治療しなきゃいけない—ではなく、これだけエネルギーがあるんだから、体操をやったらいい—。社会の人が、こういうポジティブな見方をして応援してくれたら、たとえADHDという診断を受けられなくても、この女の子には能力を伸ばすチャンスが生まれるということだ。

第4章 障害特性のプラス面を生かす

これからは、どんな障害を持つ人も、その人の障害特性を生かした仕事に就けるようにしていくことが必要だ。現状ではほとんど実現していないが、そのような発想で個別に社内で努力している企業もある。

■「丁寧さへのこだわり」で薄型豆腐作りの名人に

山口県宇部市の「リベルタス興産」は宇部興産の特例子会社で、社員40人のうち26人が障害者だ。書類の電子化やパンフレットなどの印刷を請け負っているが、「個人の能力を生かした配置」にしており、たとえば自閉症の男性が、その優れた記憶力と集中力を生かし、電子化された書類の画像と原本を見比べ、抜け落ち等がないかを確認する作業を担当している。

聴覚障害の男性は印刷機の運転を担っており、一応、機械の異常は目で見てわかるようにランプで知らせる仕組みになっているが、本人の感覚が優れているため、振動だけで異常を察知できてしまうという（朝日新聞）。

愛媛大学教授の上岡一世氏は、障害児の就労支援に長年携わってきた経験から、障害を軽減するよりもむしろ障害を生かすということをもっと考えたほうが良いと述べており、著書の中で成功例を紹介している。

たとえば、軽度精神遅滞を伴う自閉症の少年が豆腐製造会社に就職した。油揚げを作るためには、豆腐を均一の厚さに切る必要があるのだが、これはかなりの熟練者でなければ難しい作業であるにも関わらず、物事に極端にこだわってしまう彼は、そのこだわりによって短期間でマスターし、「彼が切る豆腐からはいい油揚げができる」と評判にまでなったという。

このような「丁寧さにこだわる」障害特性は、自動車会社で新車を清掃する作業や、木工所や電子機器製造会社などにおいても高く評価されているようだ。また、「記憶する」ことにこだわる子もいるが、ある玄関マットのリース会社に就職した子は、一般の従業員でもすべての商品（約120種類）を覚えるのに3年かかると言われているのを僅か1週間でクリアし、お客が必要とするマットを瞬時に選び出

す能力は、他の社員がとても及ばないほどだという（「自閉症の理解とその支援」より）。

■ 「パニックなどの問題行動で職場不適合」だったが…

雇用する側が、障害を持つ人の特性を生かそうと努力し、適した仕事を見抜くことができたとき、どれほどの違いが生まれるのか。国立情報学研究所を通じて一般公開されている上岡氏の論文「自閉症者の就労に関する研究—事例の検討を通して—」の中に、それがよくわかる事例がある。

軽度知的障害を伴う自閉症の青年なのだが、物事に極端にこだわるなどの特性があり、職場実習に5回参加したものの「パニックなどの問題行動があり、適応できにくい」といずれも評価は低く、就労は難しいとされた。しかし親の希望が強かったため、最後の実習先だった縫製会社に3ヶ月の期限付きで試験的に受け入れてもらった。

最初の2ヶ月は、相変わらず問題行動の繰り返しだった。このとき彼は、縫い上がった服の糸切りや袋詰めといった手作業をしていたのだが、その様子を観察していた社長が、「この子は機械作業が向いているのではないか」と考えた。そこで箱折りの機械作業をさせてみたら、別人のように調子が良くなったので、社長は思いきって高価なコンピュータマシンでの作業を彼に任せてみた。

すると他の従業員では正確さ、スピードともまねできないような仕事振りで、上岡氏は社長から「他の従業員がこの仕事をする、業者からクレームがつくほど」と聞かされたそう。問題行動がなくなったわけではないのだが、「対応の仕方がわかってきたので気にならなくなった」と、彼のマイナス部分も受け入れてくれているという。

第5章 能力開発社会をつくらねば

■社員一人ひとりの能力を開発する努力をしてこなかった

毎日のように新聞紙上に躍る「派遣切り」の文字。私たちが知らぬ間に企業は「正社員」から「派遣社員」に切り替えていた。その派遣社員を情け容赦なく切り捨てる。それも日本を代表する大企業が軒並みに、だ。そんな紙面を眺めていると、まるで19世紀の産業革命期、資本主義が興り、何度かの不況を体験した時期にタイムスリップしたような錯覚をしてしまう。もう一度原点に戻って社会を作り直さねばならない。

派遣切りに遭ったら、即ハローワークに通わねばならないというのも問題だ。一方企業も、社員一人ひとりの能力を開発する努力をしてこなかった。今の企業は、そんなことができるほどに成熟した社会的存在ではない。

C I（コーポレート・アイデンティティ）に対してP I（パーソナル・アイデンティティ）が企業社会で流行したことがある。会社のアイデンティティを求めるより、社員一人ひとりが自己実現する場と企業をとらえる。各自が能力を自己開拓しビジネスチャンスを見つけ、それに会社が投資をする、という関係だ。会社と、自立した社員一人ひとりとは個別に契約する。社員は会社の投資を受けてビジネスに邁進し、利益の一部を会社に還元する。これなら、不況になっても簡単に首を切られるはずはない。

会社も一定の努力をしなければならない。優秀な大卒を獲得したらそれでおしまいではなく、優秀でない社員の能力も発掘、育成し、会社に「サシでわたり合える」実力者に育てなければならない。退職時には、育てた腕で飛び立てるようにしてあげる。こういう姿勢が企業に生まれれば、心身にハンディキャップを抱えた者も雇用できるし、「企業内企業」(アントレプレナー)にまで仕立てることも夢ではない。

■幼少期から社会全体で一人ひとりの能力開発を

今度は社会の側の努力を考えてみよう。まずは学校教育のあり方を問題にしなければならない。ただ十把ひとからげに算数・国語・理科・社会を教えているだけで

は、一人ひとりが持っている能力を開発することは不可能だ。教養を身につけさせることも大事だが、ともかくも一人ひとりの潜在能力を「早く」開発し、磨きをかけさせることを最優先にしなければならない。小学生から、一人ひとりが持っているはずの特異な資質を引き出すために学校も家庭も最大の努力を傾ける。三〇～四〇人を集団にして十把ひとからげで教育をしていては、それはできない。

ハンディキャップを抱えた人に対しても、健常者と同様に十把ひとからげの教育が行われている。大人になっても「作業所」という所でまとめて手作業をやらせている。彼らにこそ一対一での潜在能力開発が行われねばならないのに。

■派遣労働者を作らない社会へ

これまで紹介してきたような、障害者に対する「障害を逆手に取る」発想を、健常者にも応用するならば、雇用問題はもっと救いのあるものになっているはずだ。一人ひとりの子の特技を磨きつつ、それを社会に認めさせ、どういう職場に適応できるかを考えたり、新しい仕事を開拓していく。

そんな努力を実行していれば、「労力を切り売りする派遣労働者」は生まれてこない。職場そのものが、今とは様相を異にするかもしれない。決まりきったラインの一角を任されるだけの労働者がいなくなれば、ラインのあり方も変わってくる。

すべての人が生まれつき備わった特性（病気や障害も含めて）を十分に生かせる社会作り—これこそが本物の福祉なのかもしれない。障害者や要介護者にどんなサービスをするかではなく、それらの障害や要介護状態が逆に能力として発揮される社会づくり—こちらへ福祉関係者もシフトしていかなければならない。

一般社会から切り捨てられた人に救済策を講じるのが、一般的に言われる「福祉」であるが、それは結果として弱者を置いてきぼりにし、そして切り捨てても許されるという、歪んだ社会づくりに手を貸すことになりかねない。現に老人や障害者を当たり前のように排除してきた企業が、自身追い詰められた時、次なる弱者（派遣社員）を切り捨てているではないか。

だからこの際ランクアップして、社会が切り捨てた人々への本当の救済のあり方の見本を示し、その見本に従って社会が自己変革するように導いていく、それによって弱者を切り捨てなくて済む社会を作り出すこと、これを福祉と言ったらどうか。

第6章 障害・病気は個性だから治したくない

■障害は「個性」の一つにすぎない

「全盲ピアニスト、米で優勝」—マスコミの発想はなかなか変わらないものである。新聞にもこんな投書が載っていた（朝日新聞）。「私が書くなら『国際ピアノコンクールに日本人として初優勝したピアニスト辻井伸行さん。ちなみに彼は生まれたときから視力に障害がありました』とする」。

投書の主・小川孟さんの言うとおりに、「障害者という人間がいるわけではない。たまたまある人が障害を持っている」にすぎない。視力障害は辻井さんの属性—個性の一つなのだが、日本人は「盲人」という人格体があると錯覚してしまう。「わが子には障害がある」と親が言いたがらない背景に、日本人のこんな奇妙な風土がある。

■「障害は個性」を構造化してみたら

この「障害は個性」を整理してみよう。図を見ながら読んでいただきたい。左が当事者、右が社会。中央に障害（病気）への見方を示してある。

障害というよりは、一人ひとりに当然、個性というものがある。障害は、その個性にまつわる不自由さ、不便さの部分（つまり属性の一つ）にすぎない。ところがもう一つ、個性の中には、才能として開花する部分もある（これも属性の一つ）。

これを「社会」はどう見るか。（障害を）相手の個性と見れば、まずはそれを良くも悪くも「あるがままに」受け入れるのが当然となる。その人がどんな変わった言動をしようが、音や光にどんな変わった反応をしようが、それはすべてその人の個性の発動なのだから、そのまま受け止める。「変わった」という表現自体がおかしい。そう評価する人自身も含めて、人間はみんな個性があるから、「変わって」いて当然である。「かわいそう」という見方もおかしい。

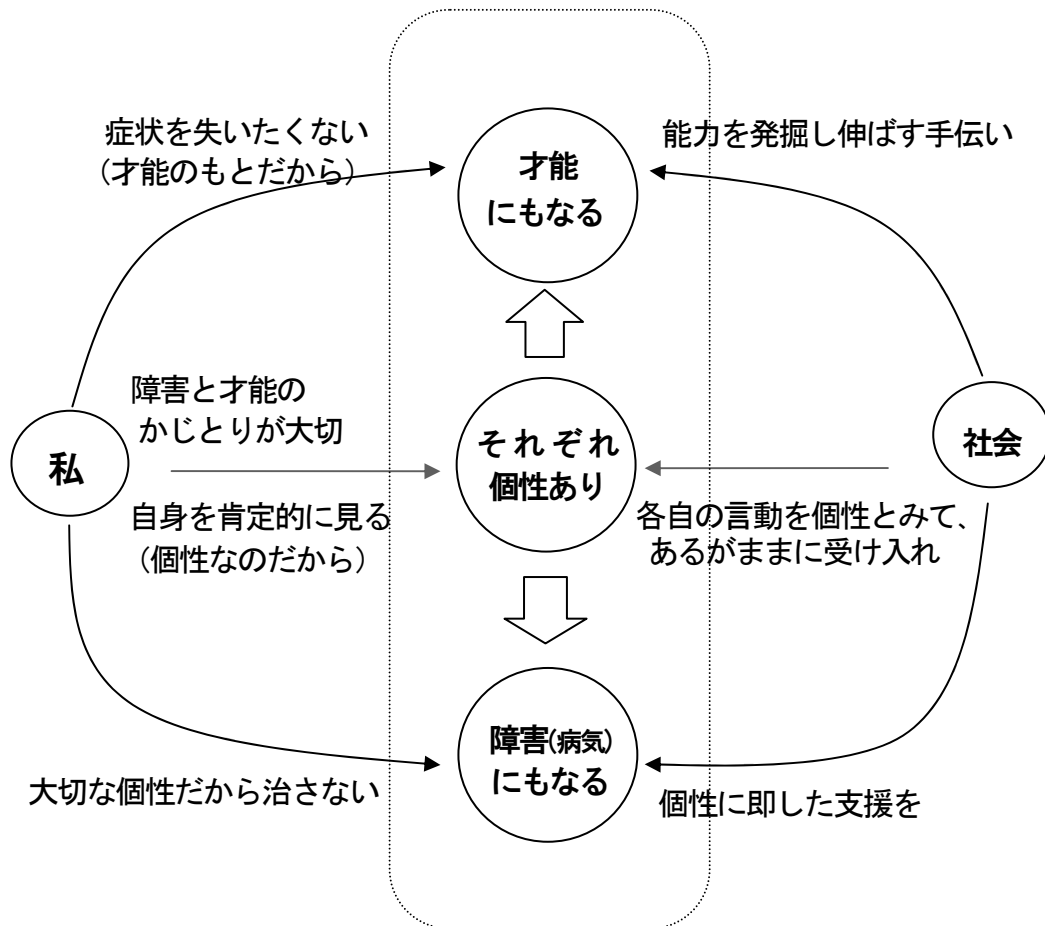
その個性のある部分が生活の不自由さや不便さとなってあらわれるのは仕方がない。その不自由な部分を補ってあげるのが社会の役割だ。個性がある分、みんな不自由の中身が違うのだから、十把ひとからげの対応はいけない。

不自由さ（という障害）を補ってあげる一方で、その障害が見方によっては才能

にもなり得るのだから、その部分を掘り起こし、もっと磨いてあげることも必要だ。

■「症状を失いたくない」

今度は、障害という個性を抱えた本人の側の姿勢なり行動のありようだ。自分の「障害」（や病気）を、自分の個性の一つなのだと肯定的に捉える。その障害を除去してしまうと、大切な個性を抹消することにもなりかねないから、「消さない」という手もある。磨き方によっては「才能」にもなるのだから、「症状を失いたくない」とも思うはずだ。要は、自分の個性が一面では障害（病気）になり、もう一面では「才能」になる。両者の間をいかに上手に舵取りするかーが当事者の役割なのだ。「ニューズウィーク」誌の日本版に「狂気の烙印を誇りに変えて」という記事が載っていた。統合失調症など精神障害を抱えた人たちのグループ「イカロスプロジェクト」が主人公だ。彼等は「マッドプライド」（狂気に対する誇り）を提唱している。精神障害者が、「自らの情報や感情の抱え方をユニーク（または非凡）であると再評価し称賛する」運動である。



■「普通」へのこだわりを取り払えば、残るは個性

彼らが目の敵にするのが「普通」という価値観である。精神障害という発想は、幻聴が聞こえたり、周囲の人々への妄想に駆られたりすることも含めて、これは自分たちの「個性」なのだから、それを取り除こうとするよりは大事にしようと言う。だから処方された薬も飲まない。

「全米8000人の会員を擁するイカロスは、ひどい病気と思われがちな精神状態も、創造的または『神秘的』なるものへ昇華できるとしている」(同誌)

まず「普通」という基準があり、そこからはずれたものを「精神障害」と枠付けし、薬を処方する。この社会から「普通」へのこだわりを取り払えば、あとに残るのは、それぞれが皆ちがう個性を持っており、それをそのまま受け止めて不便な部分だけをサポートすればいいという考え方ではないか。だからイカロスのリーダーは言うのだ。「私たちは普通であることなど望んでいない」と。

同じ「ニューズウィーク」誌でもこのテーマが取り上げられている。「自閉症が個性と認められるまで」というタイトルで、アスペルガー症候群の若者が権利擁護のネットワーク作りに奔走する様を取材している。主人公、アリ・ネエマン(21)は、「ビロードに対する過敏な反応の原因は脳にあり、ネエマン自身はそんな脳が気に入っている。彼にとっては、アスペルガー症候群の『症状』を失うなんて、とんでもないことだ。自分の大事な個性なのだから」(同誌)。

しかし、アスペルガー症候群ゆえの不便事もある。だから社会は、「さまざまな脳のあり方を(個性として)受け入れるべき」であるとともに、「自閉症者が勉強したり働いたりするのに必要な姿勢を整え、成人後は自活できるよう支援」すべきだと主張するのだ。

第7章 障害者には超高級資源を投入せよ

障害は才能だったと言っても、その能力を開発し伸ばしてくれる人材が不可欠だ。それも尋常な資源では物足りない。もともと障害を抱えているのだから、健常者と比べると、かなりのハンディキャップを負っている。それでもなんとか健常者に伍していくには、健常者に対して以上の強力な応援が必要なのだ。

■「障害者に月給十万円」はなぜ実現したか？

クロネコヤマトの宅急便を考案した小倉昌男さん（故人）は、その後、社長の地位を投げ出して、ヤマト財団を設立。とりあえず障害者福祉をやろうと、ある障害者の作業所を訪れた。作業中の障害者に「キミ、いくらもらっているの？」—見学者でこういう質問をすること自体が、異例かも知れない。すると「1万円だよ」。「フーン、それ日給？」。「いや、月給」—これには小倉さん、驚いた。

彼はそこで発奮、「スワンベーカーリー」というパンのフランチャイズ店を設立、雇用した障害者に「月給十万円」を支給することに成功した。その後、あるシンポジウムに彼を招待し、作業所の職員向けに話をしてもらった。

そのとき職員からこんな質問が出た。「私どももそのフランチャイズの仲間に入れてもらいたいのですが、有限会社にするか、社会福祉法人にするか、悩んでいます」。小倉さんは、何と答えたか？「私は有限会社にすることをおすすめしたい。会社なら、相手は従業員になります。従業員に払うのは給料。給料はウン十万円ですよ」。

では、社会福祉法人にしたら？ 相手は対象者、その人にあげるのはおこずかい。その額は…、というわけだ。「アンタたちは、ずるい」と、彼はそのとき言い放った。

「福祉」の名の下に人間を搾取している、と。「福祉」の措置にすることは、極めて低レベルの処遇でいいという共通理解がある—それが許せないと彼は言ったのだ。

福祉は、（平たく言えば）健常者以下の水準を提供していればいい—という共通理解。これを克服できるのかどうか。それがここで言う要件なのである。今時そんな低レベルの福祉でいいと思っている関係者なんていない—と抗弁する人がいるかも知れないが、では小倉さんの指摘に反論できる人が実際にいるのか？

■障害者だけに「特別の高級資源」を投入させる手法

小倉さんはどうやって「月給十万円」を実現させたのか。彼の手法には目立った特徴がある。パンはあの「アンデルセン」で有名なパンメーカーの社長を説得して、高級パンを瞬間冷凍したものを譲り受け、それを解凍機で「チン！」すればできあがり。店は都内の一等地。スタッフにはヤマトから数名、優秀な職員を借り受ける。店頭デザインも「アンデルセン」側に依頼一と、すべてが「高級」志向なのだ。一般に作業所がパン作りに取りかかろうとすると、公民館の生涯学習講座でパン作りを習った人をボランティアでお願いする、といった方法をとるはずだ。

両者の違いはどこにあるのか。障害者は、初めからハンディキャップを負わされている。そのままの状態一般の人と勝負させられたら勝負にならない。障害者に「一般」並みの資源を投入されても、「勝負にならない」点で少しも変わらない。

では、どうしたらいいのか。障害者には「一般」の人には与えられない、特別に高級な資源を逆差別的に投入させる方法である。これではじめて「勝負」になり始める。小倉さんがパンの次に目指したのは「炭」(すみ)づくりだった。そのために確保した「資源」は、なんと日本一の炭焼きの名人だった。超高級資源志向はやはり変わっていなかった。

■技能五輪の名人が刑務所で直接、技術指導

韓国のある少年院の処遇が話題になった。その少年院では、院生一人ひとりにパソコンを与えて個人指導をしているという。指導者はあの「サムスン」の技術者だ。そのためもあって、「退院」時には企業から求人が来ているのだと。これに韓国の国民は反発、「うちの子でさえ、パソコンが与えられていないのに…」と。これに少年院側はどう反応したか。「それじゃあ、あなたのお子さんを少年院に入れますか？」。

似たようなことが、日本の刑務所で実行された。日産自動車の技能五輪出場チームのメンバーや指導員が、府中刑務所で受刑者に直接、自動車整備や板金の技術を指導していると報じられた。強盗致傷などの罪で懲役八年が確定。あと二年で刑期を終えるという受刑者が「これが実際に社会で働いてお金をもらうプロの職人の、イキのいい動きなんだと実感した。その心意気を見習っていきたい」と言っていたという(朝日新聞)。

刑務所内で一生懸命技術を覚えても、いい職場に勤められないのが実情なのだろうが、技能五輪の名人に指導を受けた技術なら、事情は変わってくるはずだ。

■ゴルフの世界なら「ハンディをつける」のだが

ここで提示したような「超高級資源を福祉の当事者に差別的に提供する」というあり方は、一般人の理解を得られにくいという問題がある。福祉というものは、自分たちが享受している生活レベルより「若干下の」レベルを提供するものだ、投入する資源も自分たちより「若干下の」ものであるべきだと、私たちはいつの間にか決め込んでしまっている。

スポーツの世界に「ハンディをつける」という言葉がある。いくらゴルフ好きなあなたでも、あのウッズと一緒にマッチプレーをやらされたら、困るはずだ。文字通り「勝負にならない」。そこで、あなたにハンディをつけてくれる。競馬にもハンディレースがある。これは、「競争」をとにかくも成り立たせるためには欠かせない措置だ。日本よりもいち早く競争社会に入ったアメリカでは、その競争社会を崩壊させないためにも、社会のあらゆる場で「ハンディをつける」措置が講じられている。企業でも、白人と黒人が同等の能力を持っている時は黒人を優先採用するとか。

まさかとは思うが、英国では赤ちゃんがはじめに覚える言葉が「イツ アンフェア！」だと聞いた。「それはフェアじゃないぞ！」。故司馬遼太郎氏がアメリカ紀行の中で、「アメリカ人の好きな言葉に“フェアネス”がある」と書いていた。毎日新聞のイギリス特派員も、イギリスについて全く同じことを言っていた。

フェアネス—まさに「ハンディをつける」の発想だ。英米では、福祉の根っこにある思想が、この「フェアネス」だった。困った人を助ける—チャリティよりも、フェアな扱いをすることの方こそが本物の福祉の思想なのだというのだろう。

■「障害者は自力で這い上がって来い！」

日本人は、このフェアネスが嫌いなようである。柔道が世界競技になり、オリンピックの競技種目になると、「階級制」が取り入れられた。とたんに日本人は興ざめた。私たちは今でも「姿三四郎」が好きなのだ。柔よく剛を制す—体の小さい者が大きい者を投げ飛ばすことを、まだユメ見ている。あのとき日本柔道界がなんと

しても日本の「伝統」を守ろうと死守したのが「無差別級」だったが、残念ながらこの階級で「姿三四郎」は一人も出なかったようだ。

障害者は自力で這い上がって来い！ ハンディはつけてあげない—これが日本の「伝統」である。だから新聞やテレビに登場する「美談」の一つに、「障害を克服して」のパターンがある。障害を克服して東京大学に進学、障害を克服して大企業に就職、障害を克服して口で絵を描いた—とにかく障害は「克服」しなくてはいけない。日本は恐ろしい社会だなと、つくづく思う。

■フェアネスとは「ゲタを履かせる」こと

「ゲタを履かせる」という言葉がある。素足で背丈を比べると劣るので、ゲタを履けば、その分、相手と肩を並べることができる。この場合の「ゲタ」を見つけて、ハンディキャップのある人に履かせることこそ本物の福祉ではないか。

ところがこの「ゲタを履かせる」ことを日本人は好まない。大宮市のソニックシティ内の公園で障害者の作業所で作られている焼き菓子のコンテストが開かれた。主催はパレスホテル大宮。県内の23団体が応募し5団体が本選出場。プロの料理人の審査員と来場者百人の投票で優勝者を選んだ。優勝した製品は半年間「パレスホテル大宮」で受託販売されるほか、優勝と準優勝の製品には「ホテル推奨」の称号を贈る。プロの品質保証によって「ハク」がつけられたから、今後は百貨店などでも売ってもらえる可能性もある。

これを仕掛けたのは、「パレスホテル大宮」の洋食レストラン統括料理長の毛塚智之さんだ。彼が以前NPO団体「ハンズオン！埼玉」が主催した、売れる商品作りをめざす「クッキープロジェクト」に技術指導で参加した際、障害者たちの作業現場を見て回って驚いたのが、質に比してその価格があまりにも低いことだった。これなら商品力で勝負できると見た彼は、以降、民間企業として継続支援を始めた。

まず「パレスホテル大宮」で作業所の焼き菓子を手数料なしで販売。その中で優秀な技術を発揮していた統合失調症の青年を、今はホテルのパティシエとして雇用している。勤務時間は本人の希望を優先し、ジョブコーチの助言で同僚にも障害について説明。休みたい時に休めて、菓を飲みやすい環境も整えた。それでも時間給は一般社員と同じ。

第8章 ポジティブ思考のすすめ

■大会を開いて幻聴を競い合う患者たち

北海道の浦川町にある「べてるの家」という精神障害者の生活施設。ここからユニークな発想や活動が次々と発信されている。精神障害は治さない。再発したら、それもよし。仕事は昆布の営業。人間関係で傷ついた彼らが、まさに人間関係そのものの営業をしている。幻聴に悩まされる人もいるが、ここでは幻聴大会が開かれる。自分はこんな幻聴が聞こえてくるというのを競い合う。彼らが住民向けに開いたのは、精神障害に対する差別偏見大歓迎集会。「みなさんが差別、偏見を持ちたがるのもよくわかります」というわけだ。理解を求める代わりに、町の主要産業である昆布の販売を請け負った。

何から何まで一般の精神障害に関する行動とは逆である。その背景にあるのは、精神障害に対するポジティブな発想である。障害は個性と受け入れたり、障害を逆に活かせないかと考えたり、もしや障害というのは才能ではないか。すべては障害に対するポジティブな見方によるものだ。

■英国発の「ポジティブ・ウェルフェア」

本書はポジティブ思考を、障害を例にとって紹介したようなものなのだ。「ポジティブ・ウェルフェア」はブレア政権のスローガンの一つだったが、これを日本の前政権党の民主党が取り入れた。生活弱者に生活費を直接支給するのではなく、彼らに適した就労の機会を提供することでそのようなサービスを必要としないようにするという。サービスではなく、能力開発に予算を振り向けるという、まさにポジティブな措置だ。

■「癌はゆっくりと来るからいい」

自分の置かれた状況を悲観的に考えるか、楽観的に考えるかで、私たちの行動も全く変わってくる。「癌になったらアウト」だと思えば、それこそ自殺したくなるが、「癌はゆっくり来るから生活の計画が立てやすい」と言った人がいる。突如襲ってきて、数日内にあの世へ、というのでは、心の準備ができない。

「デフライフジャパン」という隔月刊の雑誌が滄刊されたというニュースがあった。編集

スタッフの全員が、耳の聞こえない、ろう者たちで、耳の聞こえない人生がいかにも楽しいものであるかを、体験者の口から語らせようという。

「雑誌を見た、ろうの子供たちが『こんなにすごい、ろうの大人が社会にいるんだ』と思ってくれたら」と編集長が語っている(「朝日新聞」)。障害のおかげでこんなに不便な生活になっていると、マイナスのことを語るよりも、こんなに素晴らしい人生も送れるのだと訴えた方が、ろう者への真の理解が深まるのではないかと。

「妊婦腹は美しい」とアメリカの女性写真家で妊婦腹ばかりを撮影している人がいるが、日本にも登場した。東京・世田谷区の高田奈付子さんのスタジオ「ネーブル」がその現場だが、毎月80人前後がここを訪れるという(「朝日新聞」)。最近は妊婦だけでなく、乳がん患者や子育てを終えた夫婦も訪れるようだ。

■受刑者がなんと「青少年健全育成ボランティア」

アメリカの刑務所では殺人を犯した受刑者にもボランティアをさせている。ある刑務所では、地域から「箸にも棒にもかからない」非行少年を刑務所に連れてきて、受刑者の指導に委ねている。人を殺した人物に健全育成のボランティアをさせようという。彼らの指導を受けた少年たちの多くがその後非行をやめたという。

ボランティアをした受刑者も出所後もボランティアを続けているそうだ。彼らの「おっかない」ところを生かしたというから、アメリカ人のポジティブ感覚は相当なものである。

いじめっ子対策について、タレントが言っていた。「いじめをするなど注意するよりも、その子の可能性を掘り起こし、それに夢中になれることを探してあげればいい」。自分に自信が湧けば、人をいじめているヒマはなくなるというわけだ。

愛知県内のデイサービスセンターの所長の集まりで、興味深い話題が出てきた。知的障害の青年をスタッフに採用したら、利用者たちが「私がこの子を育てる」「私が教育をする」とその子の取り扱いになったという。いつもサービスを受けるばかりの老人たちにとって、自分が面倒をみる相手ができるのがよほどうれしかったのだろう。

福祉はもとより、様々な分野でポジティブな試みが広がっているのは極めて興味深い。視点をマイナス方向に向けるのではなくプラス方向に見ていく。その時、障害者福祉も全く違った角度から眺めることができるのだ。